

若月一成さん

千葉県四街道市
若月牧場 代表

粗飼料の自給率高い資源循環型牧場 「牛・人・環境に優しい」酪農めざす

粗飼料の自給率の高い酪農家が東京近郊にいる。旧日本陸軍の演習地で農地が残っていた幸運に加え、「土を愛せよ」という先人の教えを開拓2世の経営者が守り、牧草を育てている。牛舎の新築を機に乳牛を3倍に増やしても、自給率は70%を超える。耕畜連携の循環型経営をめざすが、資材の値上がりは激しく、酪農経営の危機を訴える。

年産2000トを超えます。

——なぜ、増頭を考えたのですか。

若月 大学を卒業してすぐ酪農経営を継いだとき、経産牛は20頭ぐらいでした。少しずつ増やしてきましたが、牛舎がくたびれてきて、乳を搾るミルクングパーラーも古くなり、交換部品が入手できなくなってきたので、牛舎を新築することにしました。畜舎には膨大な投資資金が必要で、それを返済するには、それなりの規模が必要です。といって、従業員を増やすことも難しい。そこで、搾乳ロボットを4台導入することになりました。

——増頭を考えたのは、それなりの規模が必要なんです。

若月 ロボットは一日に70頭までこなせます。最適な飼養規模を探った結果、経産牛は最大300頭としました。増頭しても、常時従事する人数

は、以前と変わりません。

——増頭を考えたのは、それなりの規模が必要なんです。

「土を愛せよ」の教えを守る

——牧草などの粗飼料をみずから生産し、自給しているそうですね。

若月 その話は、亡くなった父がここに入植した頃に、さかのぼらなければいけません。

1928年生まれた父は新潟県長岡市出身です。米農家の五男で、家を継げず、満州（現・中国東北部）に開拓に行くことになり、茨城県内原町（現・水戸市）にあった満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所で、開拓研修を受

けていました。ところが満州に行く前に終戦になり、45年10月、旧陸軍の演習地だったここ、千葉県の鹿放ヶ丘に入植することになったのです。

内原町の訓練所の所長が「満蒙開拓移民の父」といわれる加藤完治でした。その加藤氏が戦後、開拓1世の激励のため、この地を訪れたとき、「土を愛せよ」という言葉を書き残しました。それが額に入れられ、当時の開拓農協の事務所に飾られていました。

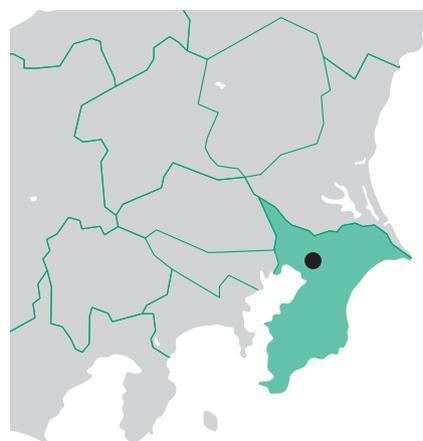
私は開拓2世ですが、その言葉が好きです。農業をやるからには、土を大事にしなければならぬ、と考えるからです。米や野菜は土からつくられ、乳牛も土で育てられた牧草を食べて育ちます。

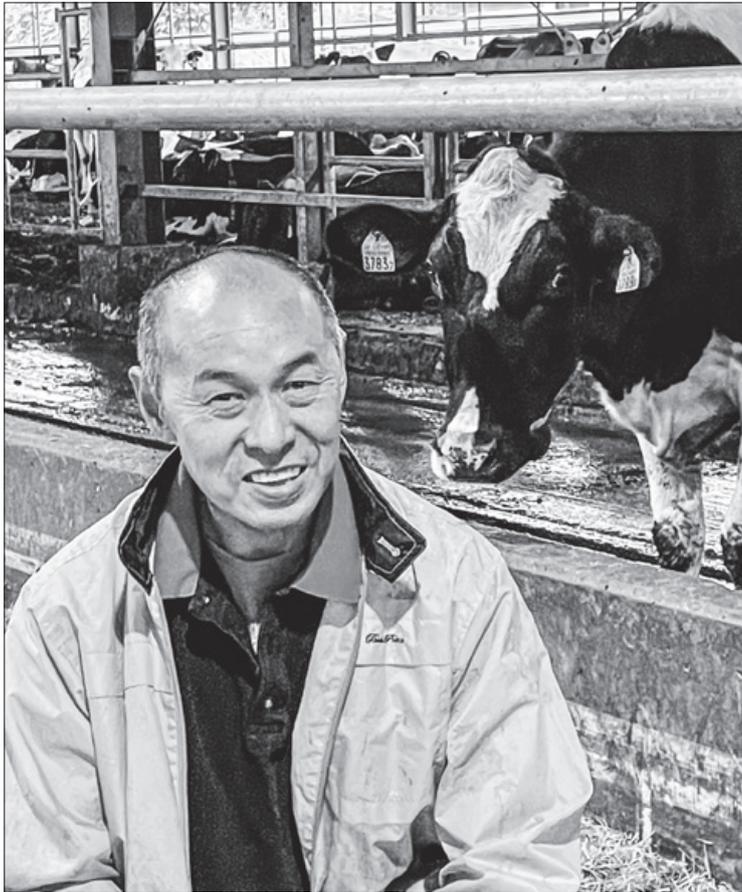
この地域の開拓地は全部で250

搾乳ロボットで300頭

——搾乳牛を増頭中と聞きました。

若月 2022年5月に新しい畜舎が竣工しました。それまでは、経産牛100頭規模で年間、約800トの生乳を出荷していました。それを22年末までに300頭まで増やすことにしました。増頭後の出荷量は、





竣工したばかりの新しい畜舎で若月一成さん=千葉県四街道市内

以前は自給率200%

鈴ありましたが、107戸に配分されたため、1戸当たりの面積は広くありません。少し農地を買い増した若月牧場でさえ、3鈴ありません。畑は、おやじたち1世が苦労して切り拓いた農地です。それから70年余り、開拓2世や3世は勤め人になる人が多く、耕作されない農地が増えてきました。

——それで、若月牧場は粗飼料の自給率が高いのですか。

若月 2022年春までの100頭規模のときは、自給率は200%でした。余った粗飼料は、仲間の酪農家に販売していました。それが300頭規模になると、完全自給は難しく、ざっと70%程度になると思います。不足分の粗飼料は、外国から干草を購入せざるを得ません。22年は、近隣の元農家から26鈴の

農地を借り、夏にはトウモロコシと牧草のスーダングラスを栽培し、冬にはイタリアンライグラスを栽培しました。いわば二毛作なので、作付面積は約45鈴になります。

さらに、千葉県佐倉市の稲作農家に、ホールクロップサイレージ（WCSⅡ発酵粗飼料）用のイネを栽培してもらっています。全部で28鈴に及びます。これはイネの子実が完熟する前に刈り取り、粗飼料とするもので、当牧場が人手と機械を出して収穫しています。

——すごい面積ですね。

若月 でも、この四街道地区は、千葉市の北隣に位置し交通の便がよく、農地が資材置き場や宅地に転用されつつあります。20年ごろまでは約30鈴借りて牧草などを育てていましたが、22年は26鈴に減ってしまいました。持ち主から「返してくれ」といわれるからで、今後も少しずつ減っていかざるを得ません。

また、26鈴を借りているといっても、畑はまとまっておらず、60力所ぐらいに分散しています。これが悩みのたねです。農地の間を早く移動できるように、道路を速く走れるトラクターを導入しなければならず、コストアップになっています。

耕畜連携の循環農業

——牛の数が増えると、ふん尿処理がたいへんです。

若月 ふん尿は全部、堆肥にしていますが、これまで全然足りていなかった。耕作している畑に、堆肥をまいていますが、100頭規模から出るふん尿からつくった堆肥は、ざっと10鈴にしかなりません。足りない分は、化成肥料などで補っていますが、300頭に増やしたので、26鈴の畑にまく堆肥がやっと自給できるようになります。

Profile

わかつきかずなり
千葉県四街道市出身。63歳。日本大学習志野高等学校、日本大学農獣医学部卒業。卒業後、22歳で家業の酪農経営を継ぐ。当時経産牛20頭足らずだったが、最新の酪農技術を取り入れて、徐々に規模拡大をはかる。農地26鈴の借地で牧草を栽培し、「牛にも人にも環境にもやさしい酪農」をめざす。千葉県三和酪農農業協同組合支部長。

Data

若月牧場
若月一成氏の父・昭三さんが、1945年10月、旧日本陸軍の演習地だった千葉県の鹿放ヶ丘（かたはら）に現・四街道市に入植し、酪農経営を始める。2022年5月に搾乳ロボット4台を設置した畜舎が完成。それまでの経産牛100頭規模から一気に300頭規模に増頭した。常時従事者は後継者の長女を含む家族3人と、社員研修生、パートの計10人。

ふん尿の処理には人手がかかりま
す。新築した牛舎では、ふん尿が自
動的に堆肥舎に掃き貯められるよう
な設備を設けています。

畑に堆肥を返して、いい牧草を育
て牛に与える耕畜連携の循環型農業
は、「土を愛せよ」を実践して成り立
つものです。

「10円値上げでは足りず」

——飼料を輸入に頼っているわが国
の酪農は、飼料価格の高騰で、かな
り厳しい状況にあります。

若月 配合飼料やガソリン代、電気
料金が高騰して、たいへんです。

酪農など畜産業に対して、国は配
合飼料の価格安定制度を設けて補填
金を支払う仕組みのほか、さまざま
な緊急対策を講じています。それで、
一息つけるという見方もありますが、
一時的な対策に過ぎません。

——2022年11月から、飲用乳価
が1^キ〓10円引き上げられました。

若月 全然足りません。配合飼料の
価格は、ひとところと比べ、ざっと3
倍ですよ。それなのに、乳価は思う
ように引き上げられなかった。粗飼
料自給率の高い当牧場でも、10円程
度の引き上げではやっていきません。

これまで、肉用に販売するオスの
子牛の販売価格が高かったのが、酪

農家にとって救いでした。その子牛
の価格が、ひとところの3分の1に下
落し、子牛を育てるだけで赤字にな
るところも出てきています。

「さらなる乳価上げを」

——どうしたら、いいのですか。

若月 一時的な補助金といったカン
フル剤を打つても、根本的な解決策
にはなりません。いまの飼料価格が
続くとすると、乳価を1^キ〓30〜50
円くらい引き上げなくては、酪農家
は現状維持できなくなると、私は見
ています。

かつて、大規模な酪農家には、ピ
ンチはチャンスだという考えがあり
ました。相対的に競争力のある酪農
家は、飼料価格の高騰で苦しいとき
でも1〜2年がまんしていれば、小
規模農家が脱落していき、飼料価格
が落ち着いてきたり生乳の供給量が
減って乳価が上がったりして、経営
が安定するというシナリオです。

でも、いまの局面ではそんな展望
は見えません。飼料に限らずエネ
ギーなどすべての資材の高騰は、1
〜2年すれば落ち着くという状況で
はないからです。

通常、乳価の引き上げは、酪農団
体と乳業メーカーとの交渉が年末に
妥結し、翌年の4月から実施される

ことが多かったのです。ところが今
回は11月という期中に値上げされた
ので、次回の値上げ交渉に、はいれ
ていません。こんな状況では、酪農
家がいなくなってしまう。

また、1頭当たりの面積は11.5㎡
の広さを確保しています。さらに、
搾乳ロボットを導入したことで、人
が搾乳室へ牛を追い込むこともなく
なり、牛が自分の意思で搾乳されに
来るので、牛のストレス軽減につな
がっています。

若月 すでに、千葉県内の酪農家の
なかには、乳代がもらえないところ
が出ています。酪農組合は乳業メー
カーから受け取る乳価から飼料代な
どを差し引いて、酪農家に支払って
いますが、飼料代の方が乳価より高
くなってしまったからです。

飼料価格の高騰の現状は、酪農家
の努力で対処できるレベルではなく
なってきたています。乳価のさらなる
引き上げはありません。

牛・人・環境にやさしく

——「牛にやさしく、人にやさしく、
環境にやさしい酪農をめざす」とい
うスローガンを掲げていますね。

若月 「牛にやさしく」は、アニマル
ウェルフェア(動物福祉)を心がけ
るということです。

新しい畜舎は牛が自由に歩き回る
「フリーバーン」方式にしました。床
はコンクリートのむき出しではなく、
「コンポストバーン」というクッシ
ョン性のいい牛床にしました。牛が
疲れないようにしたのです。

「人にやさしく」は、搾乳ロボット
の導入で、それまで365日必ず実
施していた朝晩2回の搾乳作業が軽
減されました。牛の数が3倍になっ
ても、搾乳作業は少し楽になったは
ずです。

持続可能な酪農経営

——「環境にやさしく」については？

若月 まず、畜舎の屋根に太陽光パ
ネルを乗せました。晴天のときは、
それだけで自家消費の電力をまかな
えます。また、「牛乳チラー」という
冷却システム付き生乳貯蔵タンクで、
熱を回収しています。排熱を集めて
ぬるま湯を有効に使っています。い
ずれも、二酸化炭素の削減につなが
ります。さらに、本格的な浄化槽を
設置しました。畜舎内から出る排水
は、食品工場に適用される厳しい排
出基準をクリアするレベルに浄化し
ています。持続可能な酪農経営に一
歩でも近づきたいのです。

(ジャーナリスト 村田 泰夫)

